聖書の学び資料 牧師 森 言一郎　　年　月　日

《創世記
10章1節～32節》

◆ 創世記10章の読み方

◆創世記10章を、黙想的な読み方だけで読み解くことはかなりハードルが高いと思われます。それゆえ、他の章とは別の仕方で、10章については鍵となることを提示しておきます。

① １０章の構成　大枠で５部

1) 1 節　前置き
2) 2-5 節　ヤフェトの系図
3) 6-20 節　ハムの系図
4) 21-31 節　セムの系図
5) 32 節　結び

② 特に、「前置き・１節」と「結び・３２節」だけを注意して読むとわかること　「洪水の後（のち）」に起こったことを、この箇所は伝えようとしていることがわかる

【前置き】

◆創世記10:1　ノアの息子、セム、ハム、ヤフェトの系図は次のとおりである。洪水の後、彼らに息子が生まれた。

【後書き】

◆創世記10:32　ノアの子孫である諸氏族を、民族ごとの系図にまとめると以上のようになる。地上の諸民族は洪水の後、彼らから分かれ出た。

③ この箇所はノアの「子孫」が平等に語られているか？ 「単なる系図」なのか

答えは「系図」とは言い切れない。人の名前がただ記されているのではない。

13 節以降に「リディア人、アナミム人、レハビム人･･･」等とある。

15 節以降の「カナン長男･･･」の箇所にも、16 節から「エブス人、アモリ人、ギルガシ人･･･」等とある。

つまり、「･･･人」となっていない場合でも、民族の名前であったり、町の名前であったり、国の名であったりもする。

そういう意味では、10 章全体は、いわゆる「系図」ではないことが明らかである。

④ ノアの息子たち「セム、ハム、ヤフェト」という三人の息子たちのことが平等に記されているるかと言えば、否である。不均衡である。

結論的には、最後に記される、21節以下の「長男セム」が、次章・創世記11章10節以下で、「セムの系図」として記されはじめていることから、そこに聖書はポイントを置こうとしている。

そもそも、順番からすれば最初に出て来てもおかしくない「長男・セム」のことが最初に書かれていない。でも、セムについては、11 章 10 節以下のアブラムに繋がって行く重要な存在なのである。

一方で、「三男・ヤフェト」のことは、わずかな記述 2-5 節で終わってしまう。

また、同じく、「次男・ハム」の息子の子孫が書かれる 6 節以下では、特に、15 節からの「カナン」の関連の描写が興味深い。なぜなら、「ソドム」「ゴモラ」という裁きを受けて滅亡する町のことがさりげなく置かれている。

また、「次男・ハム」と「カナン人の諸氏族」も見逃せない。「カナン」は既に出て来た名前である。創世記 9:25 節のカナンに関連する言葉として、ノアが発した「カナンは呪われよ」という言葉は見過ごしに出来ない。

⑤ ハムの子孫に関連して「ニムロド」という人物の描かれ方は特殊であり、違和感すら感じる。榊原康夫先生は「ニムロド物語」と呼び、その物語が挿入されているとまで言われる。なぜ違和感を覚えることになるのか。

結論的には、創世記11章で神による大混乱が引き越される「バベル」と深い結び付きがあるのが「ニムロド」なのである

「ニムロド」は新共同訳の翻訳では以下のように言われる。

8 節「ニムロドは地上で最初の勇士（英雄）となった」
9 節「彼（ニムロド）は、主の御前に勇敢な狩人」

榊原先生は、ニムロドはネフィリムにはない、新しい面を開拓した「狩人・狩猟の強者」だと言う。そして、創世記がこれまで、農夫、ぶどうの栽培人、遊牧者、音楽家、鍛冶屋などを記しても、決して「狩猟者」は記してこなかった、と指摘する。

さらに「神の賜物である国家権力が、悪魔的な反逆者にもなりうつことを忘れてはならない」と言う。

佐藤彰牧師は、今し方救われたばかりの、このノアの子孫からの民族の歴史の中に、再び繰り返される新たなる罪の火種を発見する、と言う。端的に言うならば、11 章に展開されるバベルの塔の物語に出てくる「バベル」がある、ということなのである。バベルは、神と向こうを張って、愚かにも神と敵対しようとする畏るべき罪人の本章を読み取ることが出来る、ということである。

人間は力を持ち、頭をもたげてくると、決まってと言ってもよい程に、神に向かって不遜の花を咲かせる。大洪水からバベルの塔へと瞬く間に移り進んだ人類の歴史は、自慢できるものではないのである。

佐藤彰牧師は最後に、「裁きから裁きへと移りゆく間に、私たちはそこから脱出して、救いの世界へと移る必要があります」と言われるのである。

⑥ 9節～10節・「主の御前に勇敢な狩人となった」ニムロド考察

山本尚忠先生の言葉　人々はこのような英雄をたのみとし、その保護者のもとに生活するようになり、狩猟者は町の守り、文化の保護者、時には人々の個人的な相談相手、助け手ともなった。そして狩猟者を中心とする人間の集団は、部落から村へ、村から町へ、待ちから国へと拡大して行き、結果として彼は国家の形成者となったのである。

一人一人のキリスト者が、そのおかれている生活の場で悪魔的なニムロドを発見し、その克服のために励むだけでなく、私たち自身にも繰り返し忍び込んでくる、内なるニムロドにも常に勝利していかねばならない。

（『説教者のための聖書講解 釈義から説教へ』）

松原栄先生の言葉　「主の前に」という表現は、主の前に広がる世界、つまり全世界を意味すると考えることができますが、主の見られる前で、世界征服と帝国建設が行われたということであり、それは同時に、主の審きの前に立たされていることも意味していると考えられます。言い換えれば、主の審きを免れる

ことは出来ないということが示されていると考えることができるのです。

さらに、「主の前にある」というのですが、それは主の前にあるにもかかわらず、主を主と思わないで、謙虚さもなく、また恐れや感謝の心もなく、ただ力ある者として立つことを現しています。

（『「創世記」講解 ―聖書の学び誌「仰望」抜き刷り―』）

林嗣夫先生の言葉　今日の世界でも人間に与えられている能力、富、権力、知恵などは、ことごとく神さまからの賜物ですが、それに気付かない人々が大勢います、と言う。

（青少年のための聖書の学び「創世記」）

矢内原忠雄先生の言葉　彼（ニムロド）は武力による最初の世界征服者、帝国建設者であったのである。

（創世記講義 聖書講義1・岩波書店 ）

⑦ セムは「アブラハム」につながって行くが、セムの系図は、創世記11章において詳しく見ることが出来る。ルカによる福音書3章23節にある系図を確認しよう。さいごに「アダム。そして神に至る」で終わるが、「ノアの息子たち」のうち名前が出るのは、ルカ福音書3章36節にあるように「セム」だけなのである。

⑧ 小畑進先生の「ニムロド」についての言葉

『創世記講録』より　その1

ニムロドは、主のおかげで、弓矢にたけ、力を得ましたが、鳥や獣に向けていた弓矢を人に向けて武力となし、権力を握っていったのでしょう。彼は〈主のおかげ〉ということを忘れ、己を神としていったのでしょう。「ニムロド」とは「われら反逆せん」という意味なのです。洪水後ふえ広がった人間には、原罪がつけつがれ、そのあだ花が咲き始めていくのです。その象徴を次の第 11 章の「バベルの塔」に見ることになるのです。

⑨ 小畑進先生の「ニムロド」についての言葉

『創世記講録』より　その2

よく見ると、実は、神の人類愛の極地への布石は、すでにこの創世記 10 章にピシリと打たれていました！「セム」です。「セム種族」です。21 節以下に記録されたセム族は、このメシアの神が人として来たり給うという福音を忘れず、証し続ける使命を託された者たちだったのです。

この「セム」族からアブラハムがあらわれ、イスラエルが出て、イエス･キリストを指さすのです。もちろん、本来なら、「セム」族だけでなく、同じノアの子たちとして生まれた「ハム」族も、「ヤフェト」族も、その使命を担うべきでした。しかし、次第に汚染していく中手に、せめても「セム」族だけでも確保して、福音の光を絶やさぬ神のご執念なのです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

☆創世記10章を概観して、あらためて、最後の節を読むと感じることがある。それは、

イエス･キリストを必要とするこの世が浮かび上がるということではないだろうか。

創世記 10章32節

【新共同訳】ノアの子孫である諸氏族を、民族ごとの系図にまとめると以上のようになる。地上の諸民族は洪水の後、彼らから分かれ出た。

【聖書協会・共同訳】以上が、国ごとの系図によるノアの息子の氏族である。洪水の後、地上の諸国民は彼らから分かれ出た。

【フランシスコ会訳】民族と血筋ごとに分けると、ノアの息子たちの家族は以上のとおりである。洪水後、彼らから地上の民族は分かれたのである。

【新改訳2017】以上が、それぞれの家系による、国民ごとの、ノアの子孫の諸氏族である。大洪水の後、彼らからもろもろの国民が地上に分かれ出たのである。

【ＬＢ】これらの人々はみなノアの子孫の家系で、洪水のあと何世代にもわたって、彼らからいろいろな国が興ってきたのです。

【70人訳】以上は、その系譜ごとの、その民族ごとのノアの息子たちの諸部族（である)。この者たちから、大洪水の後、海沿いの諸国民は地の上に散った。　※海沿いの諸国民 → 同一の表現は出エジプト記10:5でもみられる。

（以上）